

Quest

日本のクラブのはじまりは、決して
僕らが思ってるようなものではなく。

特集 **ピテカン**

Quest/クエスト

bimonthly

¥free

18

2004年6月30日発行 (偶数月末日発行) 通巻第18号

www.12.plala.or.jp/questmag/



Quest is bimonthly free mag for all the young dudes.

QUEST! 特捜部

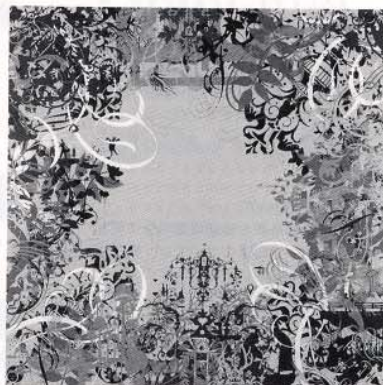
Quest
×
EC

クエスト!特捜部 in New York City

text : Yuka Iwakoshi (Educated Community)

ニューヨークで発行されるフリー・マガジン「Educated Community」(EC)とクエストがタッグを組んでお送りする「クエスト!特捜部 in NYC」。ニューヨークのアート業界で“計算された斬新でエレガントなアート”と聞いて人々の頭に浮かぶのがアーティスト、ライアン・マクギネス。バージニア生まれで数学とアートが好きだった少年は、グラフィックデザインというキャリアを経て、今多くのクライアントを持つ人気デザイナー兼アーティストとして成長した。私たちが日常目にする記号が変形され、彼なりのテイストでアートというフォーマット

に変身する様は見ていると楽しくなる程だ。最近、もっぱら彼の名前の入るショーのオープニングは盛況すぎて警察登場までおきになるパターンが続出し、海外でのショーも増えて忙しい毎日を送っている。そんな時の息抜きは、新居で奥様と過ごすゆったりした時間と毎週早朝2回のサッカーなのだとか。大のサッカー好きで知られる彼らしい。このインタビューを読んで、いつか将来アートピースを購入し、アートの本当の良さを理解してもらえたらライアンもきっと嬉しいと思う。日本の皆さん、アートは心の贅沢ですよー。ってね!



最近のエキシビションの様様や最新の作品集。みなさんの頭のなかのライアン情報をアップデートしてください。(右より時計回りに) 小誌でもおなじみfour x four が手がける222 galleryから出版された作品集「Project Rainbow」に収録された作品「Bilderbergers Bones Brigade (2004)」昨年秋にNYのDeitch Projectで開催されたソロショー「Worlds within Worlds」の展示風景と同じく昨年春にオハイオのContemporary Arts Centerで開かれたグループショー「Beautiful Losers」よりちょっと古いですが2002年冬にGASでのソロショー「This Dream Is So Life-Like」から

余計な部分がそぎ落とされたシンプルでクリーンなものが昔から好きだったんだ。



___簡単なプロフィールを。

Ryan McGinness (以下Ryan)：バージニア州のバージニアビーチで生まれ育って、ピッツバーグのカーネギーメロン大学で美術とグラフィックを平行して学んだ。10年前にNYに引っ越しして6ヶ月程デザイン会社で働いて、それから現在に至るまで自分のスタジオでアートを制作して。2年前にEGOというデザイン会社を設立してアート制作と平行してやっているよ。

___小さい頃から絵を描いたりするのが好きだったの？

Ryan：そうだね。子供の頃によく母親にペイント用のブラシと水のバケツをもらって道路に水で絵を描いた。あれは、一種言えばアートだよ。子供なりのね(笑)。でも高校の時点でアートを学ぶための大学に進学する事は決めてたんだ。

___アートスクールではなく、大学であるカーネギーメロンを選んだ理由は？

Ryan：アートスクールより大学に行きたかったんだ。あの大学にはとても良い美術のプログラムがあって、ペインティングとグラフィックを両方勉強したかった僕には最適だった。それとあの学校を選んだ理由のひとつは、コンピューター設備がとても充実してたこと。入学するとすぐに、全生徒にEメールアドレスをくれるんだ。僕らはコンピューターこそ所有してはなかったけれど、学校で生徒同士や他校生徒とメールのやりとりしてたんだ。1990年だよ。信じられる？

___最初のグラフィックデザインの仕事といえは？

Ryan：高校の時だね。学校が終わると、海軍のオフィスでポスターやフライヤーの制作を手伝ってた。その頃のガールフレンドの母親がそこで仕事をしていて、彼女が僕のアート好きを知ってたから、紹介してくれたわけ。最初に彼女の母親のいる部署のロゴを作ったらものすごく気に入ってくれて、それからだね。

___でも、海軍とかだと、制約が多くて自由にデザイン出来なかったって事はない？

Ryan：いや、それがちがうんだ。彼女の母親のいとこ

ころは、“道徳、福祉とレクリエーション”という部署だったから、海軍の人たちの為のイベントやらを計画する事も多くてさ。デザインも楽しい感じのスタイルが殆どだったし、彼らのカフェテリアのメニューデザインとかをやったりしてね。とにかくすごく楽しんでデザインしてたのを覚えている。

___その後どんなデザインをやっていたの？

Ryan：高校の頃はバンドをやってる友達が多かったから、彼らのデモテープやらライブのフライヤーなんかをデザインしてた。自分のバンドのもの。名前はGreen Suede Filthっていったさ。自分で曲書いて歌ってた(笑)。86年とかの話だよ。でもそういったデモテープやらのデザインをした時に、歌うよりもデザインしてるほうが好きかもなあと気がついたりしてさ。その他は大学2年の時に、僕の最も影響されたアーティストの一人であるアンディ・ウォーホルの美術館開館準備の手伝いでカタログなんかをデザインしてた。その美術館は僕が大学4年ぐらいの時にオープンしたと思う。

___以前に比べて最近では記号をモチーフにしたアートがあなたのトレードマークみたいになっているけれど、以前から記号とかに興味があったの？

Ryan：文字、色、いろいろなシェイプや線の組み合わせには、いつも興味を持っていたんだ。美しくカーブした線やシンプルな記号をブラシで表現する僕のアートはグラフィックデザインを学んだ上で得た技術の賜物といえると思う。時間をかけて集中して繊細なラインを描く作業は、何度もくり返して得たものでもある。

___思い出す限りでは、アイコンやシルエットのスタイルでアート制作するアーティストはあなたが最初のように思うけれど、それらのスタイルで絵を描き始めたのはいつ頃から？

Ryan：高校の時。88年とか、ずいぶん前からだよ。昔から余計な部分がそぎ落とされたシンプルでクリーンなものが好きだったんだ。人や物のシルエットを写し描きしたりしてね。高校の頃から自分の制作したシル

エットのアートをシルクスクリーンで刷ったりしてた、それらの進化した形が今の僕のアートといえると思う。

___Tシャツのデザインを始めたのはいつ頃？

Ryan：最初は高校の時。自分のバンド用のTシャツを作った。デザインした型紙にスプレーペイントでね。3ドルくらいで売った記憶があるよ。そのあとは、頼まれると作っていたけれど、実際自分のブランドでレーベルのRMを使って制作し始めたのは2年前ぐらいからかな。パーニースやらブティックとかで販売してる。

___近頃海外のショーも多いけれど、最も最近開催したショーはいつ？

Ryan：スペインのマドリードのMoriartyギャラリーで開催してるショー“Living Signs (生きている記号達)”のオープニングから帰ってきたばかり。多くの人に来てくれて有意義で楽しい時間をすごしたよ。1週間くらい滞在して壁画をペイントしたりしたんだ。準備に忙しくてあまり街自体をエンジョイできなかったけれどね。ショー自体はテーマに沿って線やシルエットや記号達が躍動感溢れるスタイルで壁いっぱいに表現された感じでも言えいいかな。後は、こないだESPOなんか20人のアーティストとコニーアイランドの遊園地の看板やら乗り物をペイントしたのは楽しかった。

Ryan：10月にパリのギャラリーでアートショーの予定があって、そのショーの為に本も制作予定。それと、サッカーボールを作るんだ！(小誌前号で紹介したNYのPrinted matterから秋頃に発売予定)

___サッカーボール？ またどうして？

Ryan：サッカーは僕の最も好きなスポーツの一つだし、ちょうどある会社から僕のデザインでプロダクトを制作しようって依頼がきてね。なんでもいって言うから、サッカーボールにしたんだ。もし君もサッカーに興味があったら、この先のサッカー場で火曜日と木曜日の朝8時30分から毎週試合してるから見においでよ！

ライアンの今後の予定

5月12～7月10日：ソロ・ショー“Living Signs”マドリードのGaleria Moriartyにて。

12月：ソロ・ショー“Fabricated Cultural Belief Systems”パリのGalerie du Jourにて。※同時期に同タイトルの本も出版予定。

2005年1月：アート・ショー“詳細未定”ミラノのPaolo Curti & Anna Maria Gambuzi & Colにて。他、最新情報は彼のサイトもチェック！

www.egosum.com

ECからのお知らせ

最新号・13号のカバーインタビューは、80年代から多くのロック&ブルース・ファンを魅了し、ミュージシャン達にも多大なる影響を与えているThe Jon Spencer and Blues ExplosionのJon Spencer。そして、インタビューはKostas Seremetis!!! 以前から彼のファンだったというKostasの、彼らしいリラックスしたインタビュー、ご期待下さい！ Questとのコラボコーナーである東京ガイド“SPY UNIT”も好評連載中で、その他いろいろ満載で、6月末発行です。*日本での取り扱い店等のお申し込みはmail@ecnyc.orgまでお気軽にご連絡下さい。